

☆☆☆ Library Eye 2021 ☆☆☆

第19号 2021年10月1日(金)

発行元 明星中学校・高等学校 図書館



【『Myojo』もあります！ 図書館の雑誌】

図書館アンケートで、毎年のようにリクエストされる雑誌『Myojo』を、今年度から定期購読することになりました。ジャニーズ推しの生徒さんは、毎月楽しみにしているのではないのでしょうか。図書館には文芸・歴史・経済・科学誌から料理・楽器・映画などの趣味や娯楽、進路や学習に役立つもの、部活に関連したスポーツ誌まで、幅広いジャンルの雑誌があります。新刊号は貸し出しできませんが、それ以外のバックナンバー（2年分）は借りることができます。

コロナ禍で図書館の利用時間が短くなっていますが、以前は休み時間や放課後に、雑誌を立ち読みする姿がよく見られました。週刊『AERA』はジャニーズ関連の記事が頻繁に載っているので、表紙を見て借りる人もいます。『鉄道ファン』や『高校への数学』は常連さんがいるようで、貸出数が多いです。

今回、全部で44タイトルある雑誌の中から、『ナショナル ジオグラフィック 日本版』を紹介します。表紙の橙色の枠が特徴で、世界36カ国語で発行されており、180カ国・850万人が定期購読しているという月刊誌（定価1,210円）です。雄大な自然、動物たち、多様な民族や文化などがテーマで、インパクトのある鮮やかな写真が多く、ページを占めています。地球の“今”を一流のフォトグラファーの一枚で知ることができます。SDGsに関連した記事もたくさんありますし、パラパラとめくるだけでも興味深いです。雑誌は手軽で、新しい情報も満載です。ネットだけでなく、たまには紙媒体からも情報を収集してみたいかがでしょう。

【料理がテーマの『おいしい小説』を展示しています！】

食欲の秋到来！ 秋は旬を迎える食材も多く、食べ物美味しい季節です。ということで、図書館では、お料理や食事などが登場人物にとって大きな意味や役割を持つ小説を展示中です。アットホームなものから、ちょっと切ないお話や、共感できる登場人物など多数の小説があります。食事は生きるために欠かせないものですが、それだけではなく、ホッとしたり、癒されたり、誰かを思い出したりと、心も満たしてくれる大切なものです。子ども食堂が舞台の『おいしくて泣くとき』、就活に失敗した女子大生が、祖母に紹介された会社に就職し、料理を通じて成長していく『ひぐまのキッチン』、母を亡くし悲しみにくれる娘と父の前に、母の教え子と名乗る金髪の女の子が、あるレシピを伝えに突然現れる『四十九日のレシピ』。どれも読み終えると、優しく温かな気持ちになるお話です。保護者の皆様も、秋の夜長に『おいしい小説』はいかがでしょう。

【中学生のおすすめ本 展示中！】

8月号でお知らせしました中学生の夏休みの宿題【おすすめの1冊】、ただ今図書館にて展示中です。

明星祭延期で、残念ながら保護者の方にお目にかけることができませんでしたが、1人分僅か11×15cmの小さな紙に、文字でびっしり埋めているものや、イラストや色をつけたカラフルなものなど、表現はみな様々で、紙面はとてにぎやかです。時には小学生向けの本や、保護者の方の愛蔵本と思われる本もあり、絶版で現在入手困難な本もありますが、紹介された本はなるべく図書館に揃えるようにしています。

気になる友達が、どんなことを感じて、どんな本を紹介しているのかを参考に、次に読む本を手にとって欲しいと思います。読書の秋です。お子様の来館をお待ちしています。

【考えさせない教育とは？】

生まれたばかりの子猫の片目を縫いつけ、目が見えはじめる時期に光という刺激を与えないでおく、あとから糸を抜いて目を開いても、その目は、二度と見えるようにはならない、といいます。視神経の反応を測定すると、光の刺激にはちゃんと反応しているのに、その目でものを見ることはできないのです。

それは、現代の子どもたちが置かれている状況に似ていると警鐘を鳴らすのは、LEDや光ファイバーを実用化した、電子工学・半導体プロセスの第一人者で、東北大学総長、首都大学東京学長などを歴任した西澤潤一氏です。「現代の学校教育は、子どもがものを考えはじめる時期に、暗記、暗記で、考えることをやめさせてしまっている。最近のIT革命でインターネットが子どもの世界にまで広がっていくと、この『考えない』という傾向がさらに強まるのではないかと、受験勉強という名のもとに一生懸命『考えない』訓練をしているにひとしい。考えていたら受験に落ちてしまうというのだから。」

この談話は今から20年も前のものですが、その心配は、はたして杞憂に終わったのでしょうか。

【ほんとうに「学問」やってるの？】



ユーモラスな異文化エッセイの著者として知られる米原万里さんは、中学2年生の時にチェコから帰国し、初めて日本で受けた定期考査のテストが、ほとんど〇×式か選択式であったことに「面食らった」と言います。

例 Q.鎌倉幕府を開いたのは源頼朝である。A.()

これがチェコなら、「鎌倉幕府が成立した経済的背景について述べよ」とか「京都ではなく鎌倉に幕府を置いた理由を考察せよ」といった具合に、限られた時間内に「獲得した知識を総動員」して、「ひとまとまりの考えを、他人に理解できる文章に構築」して伝えなければならなかったからです。知識をバラバラに腑分けして、その断片を丸暗記するように奨励する日本の教育は「苦痛」であると同時に「恐怖」すら感じた、と米原さんは語っています。

これも20年前のエッセイです。2020年度1月に大学入学共通テストで導入されることになっていた記述式を先送りし、いまだ知識の羅列化に頼っている日本は「答のない時代」に対応できるのでしょうか。

【耳が痛い!!!】

生涯一教師を貫き、「教育界の灯台」と呼ばれた大村はまさん。「好きなことを自由にやりなさいは戦後教育の一番の失敗。では、好きなことのない子はどうしたらいいの。自主性尊重の名のもとにヒントも出さないのは仕事を放棄するのと同じ。生徒が40人いたら、50ぐらいのテーマを用意していく。良い教育ほど、子どもの血肉となって、どこにどんな成果となったのかを見極めるのは難しい。深いものほどすぐには報いられない」

これも20年ほど前のインタビューです。

【道に迷っていませんか？】

「試験終了後、自由時間(12時間)と自転車を与えられたなら、どこを訪ねたいか。場所と理由を述べよ」

これは、2000年に信州大学理学部で出題された小論文入試のテーマです。出題者の井上健教授は出題の狙いを、こう語っています。「短い時間で自由な発想ができる学生を選びたい。研究では発想力が大切。決まりきった発想では研究の進歩がない」

20年後の現在、私たちは、いったいどこに立っているのでしょうか？

